

日蓮大聖人御書全集

さいれんぼうごへんじ

最蓮房御返事

新版

1779

フ

1784

最蓮房御返事

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

さいれんぼう

文永 9年 ('72)

4月 13日

51歳

最蓮房

御札の旨、委細に承り候い畢わんぬ。都よりの種々の物、たしかに給び候い畢わんぬ。鎌倉に候いし時こそ、

常にかかる物は見候いつれ。この島に流罪せられし後は、
いまだ見ず候。これ体の物は、辺土の小島にてはよによ
にめでたきことに思い候。

御状に云わく「去ぬる一月の始めより御弟子となり、帰伏
仕り候上は、今より以後は、人数ならず候とも御弟子

の一分と思しめされ候わば、恐悦に相存すべく候」云々。
経の文には「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに
に生ず」とも、あるいは「もし法師に親近せば、速やかに
菩薩の道を得、この師に随順して学せば、恒沙の仏を見た
てまつることを得ん」とも云えり。釈には「本この仏に従
つて初めて道心を發し、またこの仏に従つて不退地に住
せん」とも、あるいは云わく「初めこの仏菩薩に従つて結
縁し、またこの仏菩薩において成就す」とも云えり。この
經釈を案するに、過去無量劫より已来、師弟の契約有り

われ まつぼうじょくせ

しょう

なんえんぶだいだいにほんこく

しか。我ら、末法濁世において、生を南閻浮提大日本国に

受

かたじけな

しょぶつしゅつせ ほんかい

なんみょうほうれんげきよう

うけ、忝くも、諸仏出世の本懐たる南無妙法蓮華経を、

くち

とな

こころ しん

み たも

て もてあそ

口に唱え、心に信じ、身に持ち手に覩ぶこと、これひと

えに過去の宿習なるか。

よ にほん てい み だいろくてん まおう ちしゃ み い

予、日本の体を見るに、第六天の魔王、智者の身に入つ

しようし

じやし

ぜんし あくし

きょう

あつき

て、正師を邪師となし、善師を惡師となす。経に「惡鬼は

み い

にちれん ちしゃ

か

その身に入る」とは、これなり。日蓮、智者にあらずとい

だいろくてん まおう わ み い

い

えども、第六天の魔王、我が身に入らんとするに、兼ねて

ようじんふか

み 寄 付

ゆえ

てんま

ちからおよ

の用心深ければ身によせつけず。故に、天魔、力及ばずし

て、王臣を始めとして良觀等の愚癡の法師原に取り付いて
にちれん 怨
日蓮をあだむなり。

しかるに、今時は、師において正師・邪師、善師・惡師の
不同あることを知つて、邪惡の師を遠離し、正善の師に
親近すべきなり。たとい、徳は四海に斎しく、智慧は日月に
同じくとも、法華經を誹謗するの師をば惡師・邪師と知つ
て、これに親近すべからざるものなり。ある經に云わく「も
し誹謗せば、應に共住すべからず。もし親近し共住せば、
即ち阿鼻獄に趣かん」と禁め給う、これなり。いかに我

が身は正直にして世間・出世の賢人の名をとらんと存ずれ
ども、悪人に親近すれば、自然に十度に二度三度、その教え
に隨いもて行くほどに、終に悪人になるなり。釈に云わ
く「もし人、本惡無きも、悪人に親近せば、後必ず悪人と
成り、惡名天下に遍からん」云々。
詮ずると、その邪惡の師とは、今の世の法華誹謗の
法師なり。涅槃經に云わく「菩薩は、惡象等においては心
に恐怖なく、惡智識においては怖畏の心を生ず。惡象に殺
されでは三趣に至らず、惡友に殺されでは必ず三趣に至

る」。法華經に云わく「惡世の中の比丘は、邪智にして心
詔曲なり」等々。先々申し候ごとく、善無畏・金剛智・
達磨・慧可・善導・法然・東寺の弘法・園城寺の智証・山門
の慈覺・閑東の良觀等の諸師は、今經の「正直に方便を
捨てて」の金言を読み候には、「正直に実教を捨てて、
ただ方便の教えのみを説く」と読み、あるいは「諸經の中
において最もその上に在り」の經文をば「諸經の中にお
いて最もその下に在り」と、あるいは「法華最第一」の經文
をば「法華最第二・第三」等と読む。故に、これらの法師原

じやあく し もう そうろう
を邪惡の師と申し候なり。

さて、正善の師と申すは、釈尊の金言のごとく「諸経
は方便、法華は真実」と正直に読むを申すべく候なり。
華厳の七十七の入法界品これを見るべし云々。法華経に
云わく「善知識とは、これ大因縁なり。いわゆる、化導し
て、仏を見、阿耨菩提を發すことを得しむ」等云々。仏説
のごとくんば、正直に四味三教・小乗・權大乗の方便
の諸經、念佛・真言・禪・律等の諸宗ならびに依るとこ
ろの経を捨てて、ただ「唯以一大事因縁（ただ一大事の因縁

をもつて」の妙法蓮華経を説く師を正師・善師とは申すべきなり。

にちれん まつぱう はじ ごひやくねん しょう にちいき う
にょらい き もん さんるい ごうてき こうむ しゅじゅ さいなん
しかるに、日蓮、末法の初めの五百年に、生を日域に受け、如來の記文のごとく二類の強敵を蒙り、種々の災難に相值つて、身命を惜しまずして南無妙法蓮華経と唱え候は、正師か邪師か、能く能く御思惟これ有るべく候。

かみ あ しょうし じ よ ご しゅい あ
かみ あ しょしゅう ひとびと われ ほけきょう ここる
え ほけきょう しゅぎょう もの の そうち
え ほけきょう しゅぎょう もの の そうち
ごとく、弘長には伊豆国に流され、文永には佐渡島に流さ

たつ くち くび ざとう ほかしゅじゅ なん かず し
れ、あるいは竜の口の頸の座等、この外種々の難、数を知ら
きょうもん よ しょうし ぜんし しょしゅう
ず。経文のごとくならば、予は正師なり善師なり、諸宗の
がくしゃ あくし おぼ そうち
学者はことごとく邪師なり悪師なりと覺しめし候え。この
ほか ぜんあくにし ふんべつ きょうろん もんとう ひろ そうち
外、善惡二師を分別する経論の文等これ広く候えども、兼
ごぞんち うえ もう およ そうろう
ねて御存知の上は申すに及ばず候。

ただいま おんふみ いま いご ひごろ じやし す
只今の御文に、「今より以後は日比の邪師を捨てて、ひと
しようと たの おお ふしん おぼ そうろう われ ほんし
えに正師と憑む」との仰せは不審に覚え候。我らが本師・
しやかによらい ほけきよう と しゅつけ
釈迦如来、法華經を説かんがために出世ましませしには、
たほう ぶつぼさつとう らいりん ようごう しゃくそん ぎょううけ たす たも
他方の仏菩薩等、來臨・影響して釈尊の行化を助け給う。

されば、釈迦・多宝・十方の諸仏等の御使しやかいとして來つて、
化を日域に示し給うにもやあるらん。經に云わく「けにん我は余
國において、化人を遣わして、それがために聽法の衆を集
め、また化を遣わして○隨順して逆らわじ」。この經文に
「比丘」と申すは、貴辺のことなり。その故は、「法を聞い
て信受し、隨順して逆らわじ」、眼前なり。いかでか、こ
れを疑い奉るべきや。たとい、また「在々諸仏土、常与
師俱生（いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず）」
の人なりとも、三周の声聞のごとく、下種の後に退大

しゅしよう じょうぶつ ごらいし
取小して五道六道に沈輪し給いしが、成仏の期來至して、
じゅんじ とくだつ ねんぶつ しんごんとう
順次に得脱せしめたもうべきゆえにや、念佛・真言等の
じゃほう じゃし す にちれん でし たも あ がた
邪法・邪師を捨てて、日蓮が弟子となり給うらん。有り難き
ことなり。

へん つ よ しょしゅう ほうぼう せ
いづれの辺に付いても、予がごとく諸宗の謗法を責め、
かれ なら じゃ す しょう き たま
彼らをして邪を捨てて正に帰せしめ給いて、順次に、三仏
ざ な じょうじやつこうど もう しゃか たほう ごほうぜん
座を並べたもう常寂光土に詣でて、釈迦・多宝の御宝前に
おいて、我ら無始より已來師弟の契約有りけるか無かりけ
るか、また釈尊の御使いとして来つて化し給えるか、さぞ
しゃくそん おんつか きた け たま

と仰せを蒙つてこそ、我が心にも知られ候わんずれ。いか
かようにも、はげませ給え、はげませ給え。

かようにも、はげませ給え、はげませ給え。

何となくとも、貴辺に去ぬる二月の比より大事の法門を
教え奉りぬ。結句は卯月八日夜半、寅時に、妙法の

本円戒をもつて受職灌頂せしめ奉るものなり。この受職

を得るの人、いかでか現在なりとも妙覚の仏に成らざら
ん。もし今生妙覚ならば、後生あに等覚等の因分ならん
や。實に無始曠劫の契約、「常与師俱生」の理ならば、日蓮

今度成仏せんに、貴辺あに相離れて悪趣に墮在したもうべ
かようにも、はげませ給え、はげませ給え。

きや。如來の記文、仏意の辺においては、世・出世について
てさらに妄語無し。しかるに、法華經には「我滅度して後に
おいて、應にこの經を受持すべし。この人は仏道において、
決定して疑いあることなけん」、あるいは「速やかにこれ
疾く無上の仏道を得ん」等云々。この記文虚しくして我ら
が成仏今度虛言ならば、諸仏の御舌もきれ、多宝の塔も破
れ落ち、二仏並座は無間地獄の熱鉄の牀となり、方・実・寂
の三土は地・餓・畜の三道と変じ候べし。いかでか、さ
ること候べきや。あらたのもし、たのもし。かくのこと

そうちうう

頼

おも
く思つづけ候えば、我らは流人なれども、身心共にうれ
しく候なり。

だいじ ほうもん ちゅうや ぎた じょうぶつ ことわり じじこつこく
大事の法門をば昼夜に沙汰し、成仏の理をば時々刻々
味 ひさ す ゆ そうちら

にあじわう。かくのごとく過ぎ行き候えば、年月を送れど
にぶつ とうちゅう びょうざ じこく ほど す みようり
も久しきからず、過ぐる時刻も程あらず。例せば、釈迦・多宝
の二仏、塔中に並座して法華の妙理をうなぎき合い給いし
とき ごじつしようこう ほとけ じんりき ゆえ もろもう だいしゆ 領 あ たま

時、「五十小劫、仏の神力の故に諸の大衆をして半日の
い こつしょ はんにち
ごとしと謂わしむ」と云いしがごとくなり。劫初より以来、
このかた

ふ ぼ しゅくんとう ごかんき こうむ おんごく しま るざい
父母・主君等の御勘氣を蒙り、遠国の島に流罪せらるるの

ひと われ よろこみ あま もの
人、我らがごとく悦び身に余りたる者よもあらじ。

されば、我らが居住して一乗を修行せんの処は、いざ
われ こじゅう いちじょう しゅぎょう ところ

れの処にても候え、常寂光の都なるべし。我らが弟子
われ そうちら じょうじやつこう みやこ われ でし

檀那とならん人は、一步を行かずして天竺の靈山を見、
だんな ひと いっぽ い てんじく りょうぜん み

本有の寂光土へ昼夜に往復し給うこと、うれしとも申すば
ほんぬ じやつこうど ちゅうや おうふく たも 嬉 な もう

かり無し、申すばかり無し。

あま

そうちら

けいやくひと もう そうちら

もう

そうちら

きへん

余りにうれしく候えば、契約一つ申し候わん。貴辺の
あま そうちら たま みやこ おんのぼ そうちら にちれん

ごかんきと と ゆ

たま

みやこ

おんのぼ

そうちら

にちれん

御勘氣疾く疾く許りさせ給いて都へ御上り候わば、日蓮
ごかんきと と ゆ みやこ おんのぼ そうちら にちれん

かまくらどの

許

宣

そうちらう

しょてんとう もう

もう

も、鎌倉殿はゆるさじとのたまい候とも、諸天等に申し
かまくらどの そうちらう しょてんとう もう

かまくら かえ きょうと おとずれもう そろう。にちれんさき だ

て 鎌倉に帰り、京都へ音信申すべく候。また日蓮先立つ

許 そうら かまくら かえ そうら かまくら かえ そうら

てゆり候いて鎌倉へ帰り候わば、貴辺をも、天に申して
古京へ帰し奉るべく候。恐々謹言。

日蓮 花押

四月十三日

しがつじゅうさんいち

最蓮房御返事

ゆう

あいかま

あいかま

おんい

そうら

夕さりは、相構えて相構えて御入り候え。

あいかま

あいかま

おんい

そうら

得受職人功德法門、

委細に申し候わん。

とくじゅしきにんくどうほうもん

いさい もう そうら